

CALL NO ONE DESTINY サンプル

インターネットへの違法アップロード、ネットオークションフリマアプリなどへの出品等、不特定多数に向けた全ての転載・転売行為を禁じます。発見した場合は、一文字につき一〇円もしくは一ページにつき五〇〇〇円の掲載料(使用料)をいただきます。

Episode 1

オーエン・ムーアの伴侶は変わり者だとうわさされる。

それは彼の伴侶——エルヴィス・サリヴァンが王の従兄弟でありながら、王位継承権を放棄したことに由来するかもしれないし、魔力を持たないにも関わらず、優秀な研究

者として宮廷魔術師と呼ばれる地位にあることに由来するかもしれないし、一日中『研究室』と呼ばれる自室に引きこもっていることに由来するかもしれない。要するに変わり者だとうわさされる要素が多すぎるのだ。

オーエンもエルヴィスを伴侶として過ごすうちに一通り経験したが、それでも彼との関係を棄却しようとはこの十年一度も考えたことはなかった。

「エルヴィス、朝だぞ」

オーエンの一日はエルヴィスを起こすところから始まる。魔力の有無ではなく、優秀な研究者として宮廷魔術師という地位にある彼だが、その生活はあまりに壊滅的だ。こうして『研究室』にある机につっぷして眠っているところを起こすのは日常茶飯である。オーエンが肩をゆすると、暗い茶色の髪がさらさらと揺れた。

「……なんだ、もう朝か……」

オーエンに肩を揺さぶられて目を覚ましたエルヴィスはぎゅつと濃いオリーブグリーン目の目をすかめ、眉間にしわを寄せていた。機嫌が悪いのではなく、単に朝陽がまぶしいだけだと知っているオーエンは構わず話しかける。

「今日は王族がみな集まる日だと言われていただろ」

「……そうだったか」

王位継承権こそ放棄しているが、エルヴィスはれっきとした王族であり、その伴侶たるオーエンもともに出席することになっている。

「そうだよ」

なあ、とオーエンはエルヴィスの侍従であるエラに同意を求めた。主人の部屋の入口に控えている彼女は「そうです」と端的に肯定した。

「……朝早くから来た理由は？」

「俺にしかできない健康確認があるだろうが」

そう言つてオーエンはエルヴィスのうなじに鼻を寄せたが、そこからはなにも香らなかつた。エルヴィスはいやそうにオーエンから離れる。

「それも不要だと何回言つたらわかるんだ、オーエン。オメガとしての体調ならわたしが一番よく知つている。伊達にへ人◇の宮廷魔術師の名をもらつているわけではない」

「念のため、な」

「……信頼されていけないよう不快だ」

「悪いが、これは俺も譲れない。エルヴィスの知識と経験はこの国で一番だと知つていても、〃伴侶として〃心配させてくれ」

二人のやり取りを黙つて聞いていたエラが小声で「そんなに心配なら同じところにお住まいになればよろしいのに」とつぶやいたのをオーエンは耳にしなかつたことにする。住居を同じくしていない理由は二人ともにある。

宮廷魔術師であるエルヴィスと近衛小隊長を務めるオーエンの住まいは分かれていゝる。これは「仕事の場所も質も違うのに同じ場所に住むのは非効率だ」というエルヴィ

スの言葉に従って分けられていた。おそらくこれも変わり者だといううわさを加速させる要素の一つである。

「じゃあ、俺はこれで。また時間の前に迎えに来る」

部屋を出るオーエンをエルヴィスは不機嫌そうに見送った。

〈金を生み出す国〉として名前を馳せるアーロム帝国に暮らす住人は、生物学上の男女以外にアルファ、ベータ、オメガの三種類の区別をされる。人口の七割を占めるのは一般人とされるベータである。

残り三割を二分するのが優れた身体能力および知性を持つアルファ、非常に高い生殖能力と知性もしくは魔術と呼ばれる特殊能力を持つオメガである。なお、オメガであれば高い確率で魔術を有するが、そうでないオメガもいる。また、オメガでなくとも魔術を有する人間は生まれることがある。

オメガの一番の特徴はアルファとであれば生物学上の性別に関わらず、生殖が可能であることだ。オメガには『ヒート』と呼ばれる発情期が数か月に一度の割合で訪れる。その期間にはアルファに作用するフェロモンが放たれ、身体は本能的に生殖の準備に入る。先ほどオーエンがエルヴィスのうなじの匂いを確認したのはヒートの前兆がなにかの確認である。

アルファ、オメガとして生まれた者は基本的には宮廷で育てられ（市井で生まれたと

しても例外なく引き取られる)、齡十二〜十五で遺伝子的に相性のよい相手を伴侶——番とする。そうすることで、ヒートヒートの管理やフェロモンフェロモンを無差別にまき散らしてしまふ事故を予防し、優秀な能力を持つオメガオメガをきつちりと管理できる……という効率的なシステムだ。

エルヴィスとオーエンもそのシステムによつて番になっており、番つてから十年と少しを可もなく不可もなく過ごしていた。

「ルカの横暴はなんとかならないのか」

王宮の中枢部に向かう廊下でエルヴィスが言った。彼の機嫌が悪いのは滅多にしない正装が苦手であること(エルヴィスは装飾性が高い衣装よりも機能的な衣装を好んでいる)ときつちりと髪を結い上げられていることによる。王への不満を口にするエルヴィスにオーエンは注意する。

「おい、いくら従兄弟だからと言つて国王陛下を呼び捨てにするな」

「わたしをたしなめられる立場か? 乳兄弟のお前こそ今でも私的な場では陛下のことを呼び捨てにしているくせに」

「なつ、どうして知っているんだ」

「知らないでも思つたか」

ふん、と小さく鼻を鳴らしたエルヴィスは鬱陶しそうに黄金とエメラルドをあし

らったヘッドドレスの位置を直した。

金の採掘と採掘された金の加工品は一大産業としてアールロム帝国を支えていた。アールロム帝国は海に面しており、金は海洋地下に眠っているものである。採掘だけではなく加工も手がけるため、国内には優秀な職人が多数いる。その中でも最高峰の職人が手がけた高級品なのだから、もう少し丁寧に扱ってほしい、とオーエンは思った。

中枢部の大広間にたどり着くと、すでに他の王族たちはほとんどそろっていた。王座からは離れた場所が二人の指定席だが、王座から距離があつたとしても気持ちはまったく休まらない。

エルヴィスは気を紛らわすように、横に座るオーエンの肌に入れられた蔦を模した刺青を見る。通常は近衛兵として王の近傍に控えるが、非常時には戦場を駆ける身であるオーエンには身元がわかるように額と頬にそれぞれ紋様が彫られていた。浅黒い肌に藍色の墨と短く刈られた白銀の髪が映えている。そしてなによりも目を引くのは琥珀色の瞳だ。

「〈人〉の宮廷魔術師殿、お久しゅうございますなあ」

エルヴィスがぼんやりとオーエンを眺めていると横から声がかかった。

「〈地〉の宮廷魔術師殿もご健勝のことと存じております。しかし、今日はいかががされました？ 呼ばれたのは王族とその伴侶と耳にしておりますが」

宮廷魔術師と呼ばれる人間は三人であり、それぞれ天地人の名を冠している。〈天〉

と〈人〉の宮廷魔術師は王族であるが、〈地〉の宮廷魔術師だけは王族ではない。その彼がこの場に呼ばれていることは通常ではありえなかった。

「いえ、わたしも呼ばれておりますよ」

そう言つて彼は王家の紋が入つた通行手形を見せた。純金のそれは常時携帯しているものとは別であり、確かに彼が今日の招待客であると示していた。

「陛下が新しく伴侶を迎えられてそのお披露目をしたいのだとか」

「……陛下が？」

「まあ、わたくし程度が手に入れられる情報はたかがしれておりますけどね。ただ今日の集まりではわたくしを含めた宮廷魔術師に知らせたいことがあるのでしよう」

エルヴィスは一瞬オーエンを見たが、オーエンも首を横に振つた。どうやら初耳だったようだ。

「——うわさですけどね」

「まだ続きが？」

暗にもう聞きたくない、と示したつもりのエルヴィスだったが残念ながら〈地〉の宮廷魔術師には伝わらなかつた。

「なんでもね、〃運命〃を見つけたとおっしゃっていたそうですよ」

「……運命、ね」

それほど衝撃的な出会いであつたと喩えたいのだろうか、とエルヴィスは考える。近

衛兵かつ乳兄弟でもあるオーエンが知らないことを普段は市井にいる〈地〉の宮廷魔術師が知っているというのは考えにくい。

「あくまでうわさですからね」

「ばかにならないうわさもありますでしょう」

「まあ真偽のほどはすぐに明らかになりますからね、そう焦らず待ちましょうか」

〈地〉の宮廷魔術師はそう言う口をつぐんだ。黙って会話を聞いていたオーエンは

「平気か」とエルヴィスに訊ねた。

「……心配されるようなことは」

「ないとは言わせないぞ。顔色がよくない」

「平気だ」

オーエンがなおも追撃しようとした瞬間、広間のドアが開く音がして王の到着が告げられた。

王座に着いた王の横には〈天〉の宮廷魔術師が控えていた。オメガの女性である彼女は、星読みとしての才を活かしてその座に就いていると同時に王の伴侶でもあった。

「みな、よく集まってくれた」

王の声はよく通る。拡声器を使うことなく声を広間に響かせるのは難しいことだが、王は難なくこなす。

「今日集まってもらったのは他でもない、新しい余の伴侶の紹介だ」

その瞬間、広間ににわかに緊張が走った。集められたのは王族であり、このような場で声を上げることはないように躑けられた者だが、視線は自然と〈天〉の宮廷魔術師に向かう。多数の人間の視線を受けてもなお、〈天〉の宮廷魔術師・エレノアは顔を上げたままいつものように柔らかに微笑んでいた。王の伴侶たる女の度量は広いのだと示している彼女は誇り高くて美しかった。

「余の運命の番たるオメガだ。オスカー、こちらへ」

王の手招きによつてひとりの男性が王の傍へ歩み寄る。王の伴侶になつた者は顔のすべてを人前に晒すことを禁じられるため、男の顔はサテンで作られたフェイスマスクによつて下半分が覆われていた。燃えるような赤い瞳がこちらを射抜くように輝いていた。オスカーと呼ばれた男は広間に集められた王族たちに向かつて深々と頭を下げた。

「口がきけぬ者でな、意思の疎通は文字の読み書きで行う。宮廷内で不便がないように見てやつてくれぬか」

王の「不便がないように見てやれ」という言葉は「優先しろ」と同義だ。運命などと言つて二人目の伴侶を迎えて、一人目をどうするつもりだ、と糾弾してやりたかつたが、この場で糾弾したところで〈天〉の宮廷魔術師に恥をかかせるだけだ。

広間はしん、と静まりかえつたままだった。

王は全体の顔を見回し、特に誰からも反論がないことを確認すると満足そうに笑み

を浮かべた。見ているものを安心させるような笑顔は王の持つ才能の一つだ。

「では、本日はこれにて。国民への披露目はまた別に設けるゆえ、追って詳細を知らせよう」

王はそう宣言すると、恭しく、まるで触れたら壊れる繊細な金細工を扱うようにオスカーの手を取った。そのまま二人は広間を出て行く。まるで他に誰もいないかのように振る舞う二人に、エルヴィスは思わず大きなため息を吐いた。

「……少し、エレノアと話をする」

「わかった。待つてる」

エルヴィスの頼みをオーエンは快諾した。エルヴィスは集まりが解散してもまだ席に着いたままの〈天〉の宮廷魔術師に近寄った。オメガ同士であり、年も近い彼女はエルヴィスとともに宮廷で育った。妹のように可愛がっていた彼女が王の番となり、婚姻関係を結んだときに心から祝福したのを覚えている。

「……少し前から今日のことは『視』えていたの。だから平気よ。心配しないで」

エレノアはエルヴィスが声をかける前にそう言い切った。彼女は〈天〉の宮廷魔術師の名に恥じることない星読みの魔力——つまり先のことを見通す力を持っていた。エルヴィスの方を見ることなく言うエレノアに心が痛む。エルヴィスとて、彼女と同じ状況になる可能性はゼロではなかった。

「エレノア」

エルヴィスはエレノアの手を取った。寒くもないのに血が通っていないような冷たい手だった。

「わたしができることはなんでもしよう。また、以前のように遊びに来るといい」

「いやよ。あなたの私室、変なものでいっぱいだし、触ってはいけないものもたくさんあるでしょう？ そんなややこしいお部屋に行きたくないわ」

エレノアはそう言うと言きだした。彼女の目の端からこぼれていった一粒の水滴には気がつかないふりをする。

「ありがとうエルヴィス。あなたが優しいのは昔からね」

「買いかぶりだ」

首を横に振るエルヴィスを見ながらエレノアは小さく笑った。そして立ち上がると、エルヴィスに向かってお辞儀をした。

「ではね、エルヴィス。私のお部屋に招待するから、今度はお茶をしながら楽しい話をしましょう」

エルヴィスは肯定することも否定することもできず、曖昧にうなずいた。エレノアは「いいお茶とお菓子を用意しておくわね」と言い残して去って行った。

「……よかったのか？」

オーエンに訊ねられてエルヴィスは答えに詰まった。

「悪い、訊くことじゃなかったな」

「謝罪するくらいなら訊かないでくれ」

良い悪いで決まることではない。声をかけずにはいられなかった、というのが正しく、要するにエルヴィスのエゴである。

「俺たちも帰るか」

オーエンの提案にエルヴィスはうなずいた。集められたのは短い時間だったにも関わらずひどく疲れていた。オーエンが差し出す腕を素直に借りて歩き出す。

自室の前で待っていたエラの顔が見えたとき、エルヴィスはホッと小さくため息を吐いた。エラは主人とその伴侶の顔を見比べた上で、エルヴィスに「着替えの準備は整えております」と言った。普段はオーエンに茶の誘いがかかるところだが、エルヴィスの体調が優先である。オーエンはエラに目配せをして、その場に少しだけ残らせた。

「何かございましたか」

「……俺には何があいつを動揺させたかはわからなかった。集会が始まる前からずっと顔色が悪かったから、ゆつくりさせてやってくれ」

「かしこまりました」

一応お茶もご用意していたのですが、とエラは残念そうに言い、オーエンに水菓子の一部を手渡してくれた。瑞々しい果実はオーエンの好物である。オーエンは後ろ髪を引かれつつも自分の住まいがあるエリアに向けて歩き出した。

一方、エラもオーエンを見送ったあと、エルヴィスの私室のドアをノックした。素っ

気なく「入れ」と入室の許可が出たのでエラはドアを開ける。宮廷に住まう王族であれば皆、貴金属で美しく装飾を施すドアだが、エルヴィスの部屋のドアは飾り気のない木製だった。

「……そのままおやすみになるとお召し物が傷みます」

小言ではなく、気遣いの言葉をかけるつもりだったエラだが、正装のまま寝台で丸くなっているエルヴィスを見てつい口を衝いて出た。エルヴィスは緩慢な動きで顔を上げると、渋々立ち上がった。

「随分お疲れのようですが、いかがされましたか？」

エラはまず結び上げたエルヴィスの髪をほどこきながら問いかけた。この国の正装では髪に金糸を編み込んでおり、地位が高ければ高いほど編み込む金糸の数が多くなる。そのため本来であればエルヴィスの髪をほどこくには時間がかかるのだが、彼自身がその装飾を嫌うため必要最低限しか編み込まれていなかった。

「王に『運命』が現れた」

運命の番、と呼ばれる概念がある。この国においては遺伝子的に相性がよい者同士で番になるが、その関係を差し置いて猛烈な「番いたい」という衝動を生む相手を運命と呼んでいた。王には正室として〈天〉の宮廷魔術師であるエレノア、側室としてベータの女がひとりいたが、オメガの側室を持つのは初めてだった。そして側室がオメガという性質を持っている以上、番わず放置するという状態にはしない。

「……わたしがこれまでやってきたことは無駄だったのかもしれない」

国内のオメガ研究の第一人者として、番のシステムの精度向上を一手に引き受けてきたエルヴィスが目指していたのは、すべてのオメガの幸福な生活だった。

「それは違います。陛下と〈天〉の宮廷魔術師様が番われたのはエルヴィス様が研究に
関わるずっと前ですよ」

「……それは、そうだが」

きつぱりと否定するエラに少し救われるが、エルヴィスの気持ちは晴れない。

「ただ、わたしは……いや、なんでもない」

——あれがわたしではなくてよかった、と思ったことが後ろめたいのだ。

エラは何かを言いかけて口をつぐんだ主人を追求しなかった。ただ黙って世話をしてくれる彼女に感謝しながら、エルヴィスはされるがままだった。

(続きは本編にて！)